様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ０２５５０

研究課題名（和文）C. L. R. ジェームズの地理的移動と身体文化論との関連性およびその影響

研究課題名（英文）The correlation between C. L. R. James's geographical mobility and his body-culture theory.

研究代表者
梶原　克教（Kajihara, Katsunori）

愛知県立大学・外国語学部・教授

研究者番号：９０３１５８６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、トリニダード、イギリス、アメリカの3地域でC. L. R. ジェームズが残した、身体に関する考察の変容と地理的移動との相関関係について調査、分析をおこなった。トリニダード時代には、マッチレヴュー的なものが多くを占めたが、イギリス時代には、イギリスによる植民地主義とクリケットとの関係に関する論が展開されるようになったことが立証できた。アメリカ時代には、イギリス時代と異なり、クリケットやスポーツに言及することは少なくなり、それに反比例して映画に代表される新たな媒体で表象される身体性に焦点を当てていたことが結論として導き出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
C.L.R.ジェームズ研究は、彼のクリケット論、マルクス主義、植民地主義批判など、テーマ別におこなわれ、しかもイギリス時代に残した文献を中心に研究されることが、これまで多く、アメリカ時代に残した文献に関する研究は目立って少なかった。本研究は、彼のクリケット論を身体論という文脈に置いた点で、さらに、地理的に異なるイギリスでのクリケットへの関心が、アメリカ時代に記された映画に代表される新メディアにおける身体表現へのジェームズの関心と地続きであることが立証された点で、学術的意義がある。また、スポーツ論を映画における身体論と関係づける可能性を開いた点で、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study investigates and analyzes the correlation between C. L. R. James's geographical mobility and his body-culture theory in Trinidad, England, and the United States. While his writings in Trinidad are dominated by cricket match reviews, those in England saw the development of a theory of the relationship between British colonialism and cricket. During his stay in America, unlike the British period, James stops to write on cricket, and focuses on somatic representation in such new media as films, which overlaps with his emphasis on Marxist theory. This conclusion justifies his suspicion against the major political approach in 1940s America which was inclined towards racial problem rather than class problem.

研究分野：英語圏文化

キーワード：文化研究　身体論　英語圏文化　ポストコロニアリズム　視聴覚文化　カリブ文化　トリニダード・トバゴ　国際情報交換

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）C．L．R．ジェームズ研究の背景

ジェームズは、歴史、政治、小説、音楽、クリケットと多岐に渡るテーマに関する論考をおこなってきたために、ジェームズ研究はトピックごとに個別に論じることが多かった。たとえば、ジェームズの人種論、ジェームズの資本主義論、ジェームズのクリケット論、といったアプローチである。また、ジェームズは 1932 年に生まれ育ったトリニダードを離れて以降、英国、米国、トリニダードを移動し続けたのだが、各地域で残した論考について比較検討する研究がなされてこなかった。

（2）身体論の背景

「身体」や「パフォーマンス」に関する議論は、「精神性 vs 肉体性」「頭 vs 体」といった二項対立を越えることを目的として、近年のサラ・アーメッドやとジャッキー・ステイシーなどの研究に代表されるように、「身体文化」を「知的に」考察しようとしてきた。また、ヘニング・アイヒバーグの研究のように、知性に対して身体性を下位に置くという植民地主義的･人種主義的統治のためのイデオロギーからの解放として、歴史的・政治的文脈から身体文化を論じた研究もあったが、数としては限られている。いっぽうで、グローバリゼーション下での消費文化という文脈では、スポーツやダンスにおける黒人の身体のフェティッシュ化という側面から、身体論への批判もおこなわれている。

（3）報告者本人の研究の背景

報告者が 2001 年から 2012 年までおこなったカリブおよび環大西洋文化に関する研究では、「媒介性」「境界」「インターフェイス」という着眼点が独自なものであった。すなわち、従来の研究の主流が、いわば表象の「内容」にまつわる研究であるのに対し、研究代表者は表象の「内容」が伝達される「はざま」を問題化してきた。その際に追求されたのは、文化のインターフェイスとしての「言語態」「視覚態」「聴覚態」の問題についてであった。すなわち、カリブ文化に特徴的な「言語態」「視覚態」「聴覚態」が、インターフェイスとして「内容」自体を規定する機能を果たしている点に着眼点をおいてきた。そうした研究を受け、2013 年からは個別のインターフェイス（表現媒体）どうしの関係性を歴史的に布置し、それらの相互作用を考察することを目的として、「言語芸術」と「音響芸術」と「視覚・身体芸術」との関係性が、トリニダードという特定の国で知識人によって歴史的にどのように位置づけられ、新国家形成においてどのように実践されてきたかを研究してきた。

２．研究の目的

（1）ジェームズの身体論の解明

身体論ジェームズはクリケット論『境界を越えて』のようなまとまった書籍以外でも、ジャーナリスティックなものを含め様々な文章でポピュラーカルチャーの重要性を指摘してきたのだが、本研究は、そのなかでも「身体性」に着目している資料を収集し、書かれた地域別・年代別に分類し、体系化をおこない、ジェームズが「身体性」を重要視した経緯と理由を明らかにし、現代の文化論におけるその価値を究明することを目的としている。

（2）ジェームズによる論考の地理別傾向性

ジェームズに関する従来の研究は、彼が滞在した地域別におこなわれるものがほとんどである。すなわち、トリニダード時代、イギリス時代、アメリカ時代と住んでいた地域別に分類され、その区分けに従って研究されてきた。しかし本研究では、彼が各地域で残した論考をそれぞれ別なものと見なさずに比較検討をおこない、、「身体性」の重視という点から相違と共通性を見いだすことを目的とする。具体的には、ジェームズがトリニダードで記した “The Artist in the Caribbean” やイギリスで記した『境界を越えて』やアメリカで記した映画論は、それぞれ独立して論じられてきたが、本研究はそれら別個の地域でおこなわれた論考から共通した視点を抽出することを目的としている。

（3）ジェームズによるポピュラカルチャー論の統合

ジェームズ研究においては、クリケットというスポーツにまつわる考察、カリプソという音楽に関する考察、チャップリンの映画に関する考察など、ポピュラーカルチャーにおける異なるジャンルに関する論考が別々に扱われてきたが、本研究はそのようにジャンル上分断されてきた研究についても同一平面上で考察し、新たなジェームズ像を切り結ぶことで、「スポーツ」「映画」「音楽」といったきわめて現代的な文化への独自のアプローチ法を導き出すことも目的としている。

３．研究の方法

本研究は日本で入手不可能な資料の収集を前提とし、それらをこれまで収集してきた資料と照応させながら、分類、分析、体系化をおこなう。4 年目で最終的な結論を導く。また、成果発表と意見交換のため、国際学会で発表をおこなう。

（1）ロンドンのジョージ・パドモア研究所(George Padmore Institute)での資料収集

ジョージ・パドモア研究所（以下 GPI）は、イギリスで初めてアフリカ系およびカリブ系移民のために開かれた出版社兼書店のニュー・ビーコン・ブックス(New Beacon Books、以下 NBB)に併設されている研究所であり、いまだ電子化されていない資料が保管されている。C. L. R. ジェームズはクリケット論『境界を越えて』において、クリケットを競技者だけでなく、観客と競技者と競技本体の関係性で捉え、そこから他の社会的慣習からは見いだせない歴史的・社会的真実の作動を指摘しているが、GPI には創設者のひとりジョン・ラ・ローズ（John La Rose）とジェームズが交わした書簡を含むジェームズ関連資料のみならず、ジェームズが当時のイギリスで論考をおこなった文脈を明らかにできるカリブ移民コミュニティ関連資料（とりわけ NBB からの出版物）が豊富にあり、しかも本研究のテーマである身体論に必須な写真等のビジュアル資料も含まれているので、現地での調査をおこなう。

（2）ニューヨーク・パブリック・ライブラリーのションバーグ・センター(Schomburg Center)での資料収集

同センターはパブリック・ライブラリーの分館であり、ニューヨークのハーレムに位置し、カリブ系を含むアフリカ系に関する資料に特化した図書館である。なかでも本研究と関わりのある“C. L. R. James Letters 1939-1981”というコレクションを中心に閲覧・複写をおこなう。同コレクションは、ジェームズの最初の妻であり政治活動をともにしたコンスタンス・ウェブ(Constance Webb)との間で交わされた書簡を中心に所蔵している。ジェームズとウェブはその書簡群で、本研究のテーマであるポピュラーカルチャーについて議論しているため、ジェームズのアメリカでの論考を読み解く大きな手がかりとなり得る。

（3）GPI およびションバーグ・センターで収集した資料の分類と分析

GPI で収集した資料を時系列に並べ、ジェームズ自身の論考とその文脈を照応させることによって、イギリス時代のジェームズによるクリケットを初めとするポピュラー・カルチャー観の揺れと同一性を分析する。ションバーグ・センターで収集した資料については、映画論とスポーツ論を中心に整理・分析する。

（4）最終的な結論を導く考察と体系化

ジェームズのポピュラーカルチャー論における「身体」の扱いに関して、それまでおこなってきた考察に加え、最新の身体論および情動論を補助線とすることで、本研究の最終的な結論を導き出す。すなわち、なぜジェームズが「身体」を焦点化していくことになったのか、さらに以後の身体論等に代表される非言語的文化論やスポーツ・ライティングに与えた影響とその理由を究明する。

４．研究成果

（1）ジェームズによるトリニダード時代における考察に関してひとつの結論を導き、論文「修辞としての身体：トリニダードのカリプソとセクシュアリティをめぐって」として査読付学術誌『黒人研究』(No. 89)に発表した。そこでは、ジェームズ自身が重要な役割を担った 1962 年の独立以降にトリニダードの国家的行事となったカーニヴァル(身体芸術)と国民国家形成との関係を論じ、続いてトリニダード時代のジェームズの身体性への考察は、脱植民地過程における宗主国への反逆や抵抗を象徴する屈強さ(男性性)、さらに政治的争議を重視する好戦性という文化的な布置に収まるもので、マスキュリンな価値醸成の役割を担う部分が大きかったことを立証した。また、日本比較文学会の中部・関西支部合同大会（第 47 回中部大会）シンポジウムのパネルとして、トリニダード文化における身体性の歴史をまとめ、それとの関連性からみたトリニダード時代のジェームズの身体論について発表をおこなった。

（2）イギリス時代のジェームズがクリケットおよび身体文化へ着目した理由と、その表現形態がエスノグラフィ的表象となった理由とについて、結論を出し、ジェームズによるイギリス時代のクリケット論『境界を越えて』をキー・テクストとして、「文化の解釈学としての『境界を越えて』」という論文を公表した（『エスニシティと物語り ― 複眼的文学論』(金星堂)に所収)。同論文では、次の 3 点を立証した。①ジェームズによるクリケット選手及びそのプレーの描写は、文化人類学的な民族誌としての機能を果たしている点、②脱植民地時代の文脈では、トリニダードなどカリブ出身者の対宗主国（英国）との文化的関係が、クリケットのプレーとクリケットを巡る言説において表象されるとき、それは奪用(re-appropriation)の一形態として解釈されることが多いが、ジェームズの解釈によると、それは時代と地域によって別様に捉える必要があるという点、そして③身体文化への着目は、自ずと言表可能なものと可視的なもの（非言語コミュニケーション）との相違への考察が伴わざるを得ないという点。加えて、査読付国際学会 18th International Conference on Caribbean Literature（コスタリカ開催）で発表をおこない、旧植民地トリニダードと旧宗主国イギリスの関係がどのように変容・継承され、それがいかに表象されてきたかについて、ジェームズを含む複数の作家による記述を分析し、脱植民地時代という総合的な文脈にジェームズの論考をおくことができた。

（3）アメリカにおけるジェームズの身体論を中心に分析し、「C. L. R. ジェームズによるアメリカの身体論」という論文（『愛知県立大学外国語学部紀要』53 号）で、ひとつの分析結果を発表した。同論文では、アメリカ時代のジェームズが、イギリス時代とは異なり、クリケットのようなスポーツを対象に身体を論じることがなくなった点を指摘し、イギリス時代と異なるジェームズによる身体論の傾向について 2 点から論じた。まず、①身体を人種化することへの抵抗である。歴史的に見ると、運動する身体はしばしば人種化されてきており、それがかえって偏見を

生むこともしばしばあるからだ。たとえば、「黒人の身体能力は生まれつき優れている」だとか「黒人は水泳が苦手」などという言説はその代表である。アメリカという多人種国家では特にその傾向が強く、ジェームズがアメリカ時代に残した文章からは、そうした人種化よりもむしろ、身体を階級などの社会関係において考察する傾向が強く見られることを指摘した。次に、②ジェームズが運動する身体ではなく、ポピュラーカルチャーにおける身体性に傾倒しはじめたことに焦点を当てた。彼は、ポピュラーカルチャーとしてのG．W．グリフィスやC．チャップリンの映画に注目したが、それはイギリス時代に注目していたクリケット同様にポピュラーなものであり、だからこそ、複層的な社会関係に置かれた身体性の特徴と価値と影響力が明らかになることに重要性を見いだしたのである。加えて、③アメリカ時代のジェームズの論考を、同時代・同地域的文脈において掘り下げて考察した。すなわち、1920年代から40年代にかけての「ハーレムルネサンス」期におけるアメリカのポピュラーカルチャーにおける身体論の中にジェームズの考察を位置づける作業をおこなった。ハーレムルネサンス期は、アフリカ系アメリカ人による文芸が花開いたいっぽうで、ニグロリーグの発足を始めとして、アフリカ系アメリカ人のスポーツが注目されていた時期でもある。しかし同時期の文人たちはスポーツに対して否定的であり、その理由は、ジェームズによる身体の人種化への抵抗と同様だと見なすことができる。さらに、同時代の文人ジェームズ・ウェルドン・ジョンソンの野球に関する文献が、ジェームズ同様にポピュラーカルチャーという枠における身体性という点で視点を共有していることを立証し、「ハーレムルネサンスにおける身体の位置」（日本アメリカ文学会中部支部6月例会）として国内学会で発表したのち、共著書として論文「文化的伏流としての身体と情動」（『ハーレム・ルネサンス－〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』所収）を発表した。また、オンラインの査読付国際学会20th International Conference on Caribbean Literatureで“Body and Affect in the Writings of C. L. R. James”として発表し、その議論を「情動論」の視点から発展的に論じた。

（4）ジェームズのトリニダード時代およびイギリス時代の論考をさらに多角的に検証するために、補助線として、ジェームズからの影響を受けてはいるものの、時代的に脱植民地時代に主たる考察をおこなったジェームズとは異なり、ポストコロニアルな状況を生きたカリブ出身でアメリカとカリブの両方を拠点とするノーベル賞受賞作家デレク・ウォルコットによるトリニダード論を考慮に入れ、ジェームズの論考のパースペクティブについて考察した。その結果、ジェームズによる身体論もやはり、地理的移動だけでなく、脱植民地時代という時代的な影響を受けたために、身体の人種化への強い違和感がある一方で、ポピュラーカルチャーという脱近代的な視点を有していたがゆえに、身体性への積極的な評価につながったという結論を導き、最終成果として、査読付学術論文“After/Against C. L. R. James: Derek Walcott's View on the Postcolonial Cityscape in Trinidad”（『黒人研究』No. 92）で公表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Katsunori Kajihara	４．巻 92
２．論文標題 “After/Against C. L. R. James: Derek Walcott's View on the Postcolonial Cityscape in Trinidad”	５．発行年 2023年
３．雑誌名 黒人研究	６．最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梶原克教	４．巻 53号
２．論文標題 C. L. R. ジェームズによるアメリカの身体論	５．発行年 2021年
３．雑誌名 愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）	６．最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004447	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 梶原克教	４．巻 89
２．論文標題 修辞としての身体：トリニダードのカリプソとセクシュアリティをめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 黒人研究	６．最初と最後の頁 107-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 梶原克教	４．巻 87
２．論文標題 奪用を超えて―C. L. R. Jamesとクリケット	５．発行年 2018年
３．雑誌名 黒人研究	６．最初と最後の頁 22 - 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 C. L. R. James's Different Approaches to the Body in Trinidad, England, and America.
３．学会等名 21th International Conference on Caribbean Literature（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 ハーレム・ルネサンスにおける身体の位置
３．学会等名 日本アメリカ文学会中部支部6月例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Katsunori Kajihara
２．発表標題 Body and Affect in the Writings of C. L. R. James
３．学会等名 20th International Conference on Caribbean Literature（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 カリブのポピュラー・カルチャーにおけるクィアネス
３．学会等名 日本比較文学会　中部・関西支部合同大会（第47回中部大会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Katsunori Kajihara
２．発表標題 Against Romantic Ecopoetics
３．学会等名 18th International Conference on Caribbean Literature（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 文化の解釈学としてのBeyond a Boundary
３．学会等名 日本英文学会第89回大会シンポジウム「身体・人種・人間 ― 英語圏文学研究の人類学的転回」
４．発表年 2017年

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 奪用を超えて ― C. L. R. Jamesとクリケット
３．学会等名 黒人研究学会第63回年次大会シンポジウム「Caribbean Lives と国際性」
４．発表年 2017年

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 トリニダード、イングランド、クリケット ― Beyond a Boundaryに見られる政治とスポーツを巡って
３．学会等名 MESA多民族研究学会第28回全国大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 梶原克教
２．発表標題 文学/言語と映像の境界
３．学会等名 テクスト研究学会第17回大会シンポジアム「アダプテーションの「境界」」
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 梶原克教	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 612
３．書名 『ハーレム・ルネサンス―〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』所収「文化的伏流としての身体と情動」	

１．著者名 梶原克教	４．発行年 2019年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 414
３．書名 『エスニシティと物語り ー 複眼的文学論』所収「文化の解釈学としての『境界を越えて』」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関